

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01315

研究課題名（和文）戦前期東京における住宅開発と生活空間の変容 東京府渋谷区を事例に

研究課題名（英文）Housing development and transformation of living space in prewar Tokyo: A case study of Shibuya Ward, Tokyo Prefecture

研究代表者

根岸 茂夫 (Negishi, Shigeo)

國學院大學・文学研究科・名誉教授

研究者番号：30208285

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,300,000円

研究成果の概要（和文）：戦前期東京西郊が都市化と人口増大により生活空間が変容する過程の、典型的な二タイプの住宅開発を渋谷において論究した。一は明治初期旧佐賀藩主鍋島家が旧大名屋敷を取得、茶園・農場に開拓し、大正期計画的な住宅開発と分譲により高級住宅地となった松濤地域である。これは鍋島家の東京・佐賀の家政・経営に位置づけられる。二は明治期山林・耕地を名望家の朝倉家が、大正末期土地整理事業に着手、人口増大に借家・長屋を建築し、地主たちの不動産管理も代行した代官山地域である。戦前期渋谷の借家率は80%に及び、この借家層の住宅を担ったのが地域の不動産業である。昭和期には近代の間取のアパート経営にも着手し生活空間を変貌させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来研究のなかった戦前期渋谷周辺の住宅開発と生活空間の変容について、散逸史料の収集、新発見史料の調査・整理によって解明し、東京の近現代史研究の推進に寄与した。また、松濤を開発した旧佐賀藩主鍋島家の研究を通じて、地域を超えた研究の連携を深めた。かつ、佐賀市の鍋島報効会、渋谷区立渋谷区郷土博物館・文学館と共同研究を推進し、地域の歴史・文化の発展に寄与できた。さらに代官山朝倉家文書の調査・整理作業を通じて、地域の史料保存とアーカイブの構築に協力した。一方、佐賀市・渋谷区代官山において公開シンポジウムを実施し、研究の一端を公開するとともに、まちづくりを推進するNPO法人などとも協力関係を築けた。

研究成果の概要（英文）：This study uses Shibuya as a case study to examine two typical types of housing development that occurred in the prewar western suburbs of Tokyo as a result of urbanization and population growth. The first was "Shoto," a farm developed by the Nabeshima family, the former feudal lords of Saga, which later became a high-end residential area through planned housing development. This development can be seen as the management of the Nabeshima family. The second was "Daikanyama," where the prestigious Asakura family embarked on a land consolidation project to consolidate forests and cultivated land, building rental houses and tenement buildings, and managing the real estate on behalf of the landowners, developing the area. The rental rate in Shibuya was as high as 80% during the prewar period, and the real estate industry in the area where these rental houses were built transformed the area into a modern living space during the Showa period.

研究分野：歴史学

キーワード：戦前期 渋谷 佐賀 松濤 代官山 住宅開発 生活空間 鍋島家

1. 研究開始当初の背景

旧江戸の市街地を範囲とした東京市の人口は、明治期に都市化が進むなかで増加した。市に近接する淀橋町(現新宿区)・渋谷町(現渋谷区)などは、関東大震災後に人口が増加し、東京近郊の農村地帯だった地域は一挙にその姿を変えた。このような東京における都市化と住宅に関わる研究は数多くある。戦前東京における借家・仮間市場の実態を行政刊行物などから量的に把握した小野浩『住空間の経済史』(日本経済評論社、2014年)、世田谷の耕地整理組合による宅地形成の実態を明らかにした高嶋修一『都市近郊の耕地整理と地域社会』(日本経済評論社、2013年)など、注目すべき研究があるが、東京市の近郊地域に関する研究は乏しい。

この他、東京の都市計画について、越沢明『東京都市計画物語』(日本経済評論社、1991年)など優れた諸研究があるが、本研究の対象である渋谷についての言及は、繁華街の渋谷駅周辺に限られている。また、土地利用のあり方から関東大震災後の復興過程を論じた田中傑『帝都復興と生活空間』(東京大学出版会、2007年)の対象は、下町が中心である。戦前期渋谷において、人々の暮らしの実態や、宅地開発を担った人々がどのような意図や目的も明らかにはなっていない。

東京における住宅と生活空間に関する研究は、行政刊行物、火災保険特殊地図や旧土地台帳、関係する新聞・雑誌記事、偶然残された関係史料などに依拠していた。とりわけ渋谷・新宿・池袋といった東京近郊地域については、一次史料に基づいた研究が乏しかった。このなかで、渋谷区郷土博物館・文学館特別展図録『住まいからみた近・現代の渋谷の』(2007年)は、建築学の側面から渋谷の住宅地・生活空間に焦点を当てた好研究だが、図録という性質上、記述の多くは概要に止まっている。なお、繁華街としての渋谷を論じた研究に吉見俊哉『都市のドラマトゥルギー』(弘文堂、1987年)があるが、住宅地の記述は僅かである。

研究代表者が属した國學院大學では、2002年より「渋谷学」を全学的な試みと位置付け、「渋谷学研究会」を立ち上げて人文・社会科学を中心に約20年にわたり渋谷の研究を継続している。その成果は、全5冊にまとめられた渋谷学叢書に結実している。そのなかで、渋谷が繁華街としての面を有する一方、戦前期には住宅地としての発展を遂げていたことが明確になった。また、現代の渋谷が後背地として的高级住宅街を複数擁するなど、新宿・池袋とは異なる特色を有していたことも明らかになった(上山和雄「渋谷の魅力、その歴史的成り立ち」・内山京子「開拓使と御料地の時代」・手塚雄太「渋谷区の誕生」上山和雄編『歴史のなかの渋谷—渋谷から江戸・東京へ—』雄山閣、2011年)。しかし、住宅と生活空間の歴史的変遷の研究は、史料の制約から残された課題となっていた。

こうした状況で研究代表者らは、戦前から渋谷区代官山で不動産経営を営む朝倉家文書、同区松濤を開発した旧佐賀藩主・鍋島家旧蔵文書を新たに確認した。

本研究ではこれらの新史料を用いることで、これまで解明されてこなかった戦前期渋谷における住宅・生活空間の歴史的変遷を、開発者と生活者の双方の視点から明らかにし、日本の首都東京のなかでも際だった存在感を示す渋谷の歴史的基層を複眼的に示すものである。

2. 研究の目的

本研究は、戦前期の東京市近郊地域における住宅と生活空間の変容を、住宅開発を担った開発者たち、その住宅に暮らした生活者たちの双方に着目して明らかにするものである。本研究では、渋谷における住宅と生活空間の歴史的変遷を、研究代表者らが新たに確認した代官山朝倉家文書、及び松濤の開発に関わった鍋島家の関係文書を用いて明らかにする。

第一の研究対象は、渋谷区内の全般の住宅事情と、そこに暮らす生活者の実態である。第一次史料が知られておらず、戦前の渋谷の住宅事情については行政刊行物からしか実態を窺うことができなかった。そこで本研究では朝倉家文書のなかに見出した、1945年に作成された渋谷区内借家調査の個票、及び國學院大學所蔵の渋谷区「家屋税台帳」といった新史料を用いることで、この点を明らかにする。これらの個票・台帳は、土地・家屋の所有者名、賃貸者名、建物の間取りなどが記されており、借家調査の個票には職業や家賃まで記載されている。ここから、渋谷に暮らす人々の住宅環境や生業など実態に即した分析が可能となる。

第二の研究対象は、住宅の開発者たちの実態である。開発者の研究で扱う第一の事例は、松濤の分譲を担った鍋島家である。鍋島家の宅地分譲について基礎的なことすら研究開始時点では推測に留まっていた。本研究では、國學院大學が収集した鍋島家東京事務所史料に加え、佐賀県立図書館や鍋島家12代当主直映が設立した鍋島報効会、渋谷区立郷土博物館・文学館に所蔵されている関係史料、あるいは鍋島家と縁戚関係にあった梨本宮家や旧藩主家文書なども用いて、これらの課題を明らかにする。第二の事例は代官山朝倉家、及び渋谷区の中地主・家主が結成した不動産信託会社である。この点は、朝倉家文書にある不動産経営関係史料を用いてその実態に迫る。

3. 研究の方法

研究は、東京・佐賀の研究者の共同研究として開始された。まず研究史料の分析を分担して鍋島家文書班と朝倉家文書班とに研究代表者・研究分担者・研究協力者を分け、新出史料の整理とともに既知の史料の確認・点検を行った。

佐賀の鍋島家文書班は佐賀市の鍋島報効会の協力を得て、同会所蔵の鍋島家文書・同会が寄託する佐賀県立図書館収蔵鍋島家文書の調査検討を行い、また鍋島報効会において史料研究に当たる事務局長富田紘次氏にも研究協力者として参加いただいた。東京の鍋島家文書班は國學院大學が収集した鍋島家旧蔵文書、渋谷区郷土博物館・文学館が収集した鍋島家旧蔵文書を調査・撮影し、その他関係史料を調査して検討を重ねた。かつ渋谷区郷土博物館・文学館からも研究協力を得て、学芸員田原光泰氏に研究協力者として参加いただいた。富田氏・田原氏とも公開シンポジウムでは研究成果の発表もお願いした。

朝倉家文書班は東京のみで、渋谷区の代官山朝倉不動産が所蔵する朝倉家文書を倉庫から出して整理する作業を続け、研究に必要な史料を撮影した。史料は未整理の状態であり、明治前期から戦後期まで約4000点を数え、目録を作成しながら中性紙の袋に収納して保存措置を講じた。整理が済んだ史料から順次確認して検討作業に入り、必要な史料を撮影し、またデータベース化した。なお目録はほぼ完成したが、個人情報保護などの観点から公開・非公開を分類する作業が残っており、まだ公開に至っていない。

令和2年度から月1回程度Zoomによるリモートの研究会を開催し、参加者が交代で研究発表・史料紹介・関連研究の紹介などを続け、研究の現状と成果を共有した。令和3年12月には東京の研究参加者が佐賀市に出張し、鍋島報効会・佐賀県立図書館の鍋島家文書を調査するとともに、史料を見ながら佐賀の研究参加者と情報交換・意見交換を行った。

令和4年12月、佐賀市において公開シンポジウム「鍋島家の近代を語る—東京渋谷と佐賀—」を対面形式で開催し、約70名の参加者を得て研究成果の一端を公開し、地域に還元し地域の方々や研究者と交流するとともに、東京の研究参加者が鍋島報効会・佐賀県立図書館の鍋島家文書を調査した。令和5年12月には渋谷区代官山において公開シンポジウム「松濤と代官山の暮らしを探る—戦前期渋谷の住宅開発と生活空間—」をハイブリットで開催し、対面・リモート併せ約180名の参加者を得て研究成果の一端を公開し、地域に還元し住民・研究者と交流の機会を得るとともに、併せて佐賀の研究参加者が國學院大學所蔵の鍋島家旧蔵文書を調査し、東京の研究参加者と情報交換・意見交換を行った。

令和2年から4年にかけてコロナ感染対策の影響を受け、佐賀・東京への出張が延期され、代官山朝倉家文書調査の実施なども影響を受けたが、最終年度には所期の研究目的を達成することができた。

4. 研究成果

本研究は、戦前期に東京西郊が都市化し人口が増大する過程における住宅開発と生活空間の変容について、典型的な二つの異なるタイプの住宅開発と地域の変貌を検討した。

第一に、明治初期に旧佐賀藩主鍋島侯爵家が旧大名下屋敷を取得し、広大な土地を茶園・農場として開発し、のち東京の屋敷をこの地に移し、大正期には計画的に住宅開発と分譲を行い、戦前期から戦後には瀟洒な高級住宅地として知られるようになった松濤地区である。

この開発は、鍋島家の東京・佐賀における家政・経営の中に位置づけられて実施され、明治前期には鍋島家が茶園・農場として開発するが、都市化の進展などにより経営方針を転換し、松濤の地を宅地開発し分譲するようになる。一方でかかる経営方針は、佐賀における旧藩主としての鍋島家の伝統と近代における位置、東京在住の旧藩士による「佐賀閥」の統合の象徴という鍋島家の立場とも関わっていた。こうした立場の鍋島家の立場や経営については、本研究で翻刻した鍋島家内庫の先例集『早引諸集』（鍋島報効会所蔵鍋島家文書『鍋島家の近代を語る—東京渋谷と佐賀—』本研究報告書に収録）からも窺える。この解明には鍋島家の家政組織と家令などによる意思の決定過程の検討が必要であり、本研究はこの点についても考察を重ねた。鍋島家と松濤との関係は、松濤の屋敷を利用した鍋島家の家族の検討も必要である。鍋島家から梨本宮に嫁した伊都子の記録に松濤の鍋島家の生活が見いだせる。

松濤の鍋島邸では、旧佐賀藩出身者を招いてしばしば園遊会が開催された。その名簿からは鍋島家が佐賀県人への育英事業に尽くした様相が見え、松濤は鍋島家や佐賀県人にとって佐賀と東京をつなぐ象徴でもあった。

鍋島家による松濤の宅地開発では、大正末期には公園や小学校を建設し、環境を整備しながら宅地分譲を進めたが、敷地も広く華族・官僚など上層の人々の住居が集まった。そのため松濤は、周辺の地域とは異なる瀟洒な高級住宅地となっていく。

第二は明治期に耕地・山林が大半であった地域を、地域の有力者朝倉家が、大正末期以降に土地整理事業を実施し、借家・長屋を建築して、増大する人口に対応し、また地域の地主たちの借

家管理を行う「共託社」を設立した代官山を中心とした地域の事例である。戦前期渋谷区の借家率は80%に及び、住民の大半は借家層であり、こうした階層の住宅開発を担当したのが地域の不動産業であった。一方で朝倉家は昭和期にはアパート経営に着手し、間取りを近代的な居住空間に変えていった。

代官山周辺は、明治期には耕地と山林で占められ人家は稀で、その西を流れる目黒川沿いは湿潤な水田や畑が流れに沿って細く連なる土地であった。この地の名望家朝倉家は、明治期以来米穀商・水車業を拡大させながら土地も集積し、不動産業にも従事し、大正末期からは目黒川流域の土地整理事業を推進するとともに、蛇行していた目黒川を直流にして周辺を整備して宅地化を進めた。

関東大震災後に東京市内から流入して人口が増大すると、山林や畑が宅地が変わっていくが、宅地の多くは借家・長屋である。借家には広大な屋敷もあったが、多くは小規模な家屋や長屋であり、道路沿いの長屋には一階が店舗や作業場、二階が住居という建物も多かった。地域の中小の地主層が借家・長屋を建設したのである。代官山地区は高台にあり、高台には広大な屋敷も存在したが、その周辺の低い地区には小規模な家屋や借家・長屋なども多かった。

朝倉家の当主朝倉虎治郎は政界に進出し東京府議会議長まで勤めたが、朝倉家は不動産業に関わり、1926年に地域の地主たちの不動産を委託管理する「共託社」を設立し、地主たちの貸家業務をまとめて代行し、徐々に委託者の数を増加させている。

戦前から戦時期にかけて借家層の実態と居住空間については、戦時期の1945年3月に渋谷貸家組合が調査した記録があり、300軒程度であるが、所有者・所在地・貸家の構造・家賃・借主・借主の職業・地主・管理人などが記録され、貸家の図面が添付されており、諸性質や女中室がある邸宅から、六畳・三畳・土間だけの長屋までの記録から、多くは下層の住人の生活を住居から復元できた。この記録作成の2か月後1945年5月、渋谷区は大半が空襲により焼失し、記録に見える借家も大半が焼失しているところから貴重な史料であり、多様な分析ができた。

一方1926年には代官山に同潤会アパートが建設され、近代的な間取りのアパートが出現しているが、朝倉家も戦前期から静宏荘アパートを多数建設し、近代的な間取りによる新たな生活様式を普及させていた。

以上の高級住宅地としての松濤と、高級住宅地と借家・長屋が混在する代官山という二タイプ of 住宅開発を比較検討し、渋谷を中心とした生活空間の変容と、その背景にある鍋島家の家政、朝倉家の経営を論じ、従来史料が僅少とされて研究がなかった渋谷を中心とした住宅開発と生活空間の変容について、新たな分析ができた。

以上の成果の一部は、令和4年12月佐賀市における公開シンポジウム「鍋島家の近代を語る―東京渋谷と佐賀―」、令和5年12月渋谷区代官山における公開シンポジウム「松濤と代官山の暮らしを探る―戦前期渋谷の住宅開発と生活空間―」により、地域の住民と研究者などに公開し、研究成果を地域に還元するとともに交流を重ねた。

また代官山朝倉家文書については、史料保存の措置をとるとともに、所蔵者の意向に沿って史料のアーカイブス化に協力している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 根岸茂夫	4. 巻 63
2. 論文標題 関東入国後の旗本知行と朱印状	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 埼玉の文化財	6. 最初と最後の頁 52-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 手塚 雄太	4. 巻 38(1)
2. 論文標題 戦前日本における個人後援会の全国分布－内務省警保局資料を中心に－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 選挙研究	6. 最初と最後の頁 33-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 手塚 雄太	4. 巻 123(10)
2. 論文標題 戦前日本の選挙運動と候補者家族	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 内山 京子	4. 巻 7
2. 論文標題 征韓論政変前後の言論状況と木戸派(1)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 國學院大學栃木短期大学日本文化研究	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩橋清美	4. 巻 123(5)
2. 論文標題 「赤気」と近世社会－明和七年の「赤気」をめぐる人々の対応と認識－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木歳幸	4. 巻 10
2. 論文標題 我が国薬事制度の成立と佐賀藩医師	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ISHIK2020.2021	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩橋清美	4. 巻 99号
2. 論文標題 明和七年の赤気－江戸時代の人々が見たオーロラー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神奈川大学評論	6. 最初と最後の頁 152-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩橋清美	4. 巻 1-21
2. 論文標題 「赤気」と近世社会－明和七年の「赤気」をめぐる人々の対応と認識－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩橋清美・大邑潤三・加納靖之	4. 巻 70巻3号
2. 論文標題 文理融合で切り拓く歴史地震研究の現在；一八三〇年の京都地震を事例にしてー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地方史研究	6. 最初と最後の頁 97-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林和生	4. 巻 93巻6号
2. 論文標題 書評 石原潤：中国の市（いち） 発達史・地域差・実態	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地理学評論	6. 最初と最後の頁 471-473
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯部洋明・玉澤春史・岩橋清美	4. 巻 25号
2. 論文標題 近世史料にみるオーロラと人々の認識ー文理協働による成果と課題ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 書物出版と社会変容	6. 最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩橋清美	4. 巻 37号
2. 論文標題 「花月日記」に見る松平定信の人間関係と文化活動	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法政大学多摩論集	6. 最初と最後の頁 207-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根岸茂夫	4. 巻 13号
2. 論文標題 参勤交代行列の構造	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 國學院大學研究開発推進機構紀要	6. 最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富田紘次	4. 巻 1
2. 論文標題 「旧佐賀藩主」鍋島家 近代における鍋島家と佐賀	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 鍋島家の近代を語る－東京渋谷と佐賀－(研究課題番号20H01315「戦前期東京における住宅開発と生活空間の変容－東京府渋谷区を事例に－」報告書1	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内山京子	4. 巻 1
2. 論文標題 鍋島侯爵家の日常－家政と家職－	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 鍋島家の近代を語る－東京渋谷と佐賀－(研究課題番号20H01315「戦前期東京における住宅開発と生活空間の変容－東京府渋谷区を事例に－」報告書1	6. 最初と最後の頁 22-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田原光泰	4. 巻 1
2. 論文標題 鍋島侯爵家の渋谷開発	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 鍋島家の近代を語る－東京渋谷と佐賀－(研究課題番号20H01315「戦前期東京における住宅開発と生活空間の変容－東京府渋谷区を事例に－」報告書1	6. 最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 内山京子
2. 発表標題 鍋島講釈家の日常－家政と家職－
3. 学会等名 渋谷近現代研究会 公開シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 富田紘次
2. 発表標題 「旧佐賀藩主」鍋島家－近代における鍋島家と佐賀－
3. 学会等名 渋谷近現代研究会 公開シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田原光泰
2. 発表標題 鍋島侯爵家の渋谷開発
3. 学会等名 渋谷近現代研究会 公開シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 内山京子
2. 発表標題 渋谷在住皇族・華族の生活空間と日常と日常
3. 学会等名 渋谷近現代研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮本 誉士
2. 発表標題 國學院大學研究開発推進機構における「渋谷学」事業について
3. 学会等名 渋谷近現代研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根岸 茂夫
2. 発表標題 幕臣川路聖謨の出世と行列
3. 学会等名 国史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内山 京子
2. 発表標題 鍋島侯爵家の日常と日光
3. 学会等名 栃木市民大学第4回講座
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩橋 清美
2. 発表標題 『集古十種』編纂に見る松平定信の歴史意識
3. 学会等名 国史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木歳幸
2. 発表標題 鍋島直正『御診察日記』にみる西洋医学治療
3. 学会等名 渋谷近現代研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木歳幸
2. 発表標題 Establishment of Japan's pharmaceutical affairs system and Saga domain doctor
3. 学会等名 The Society for History of Indigenous Knowledge
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根岸茂夫
2. 発表標題 史料紹介 明治 22年松濤園「製茶場金銀請払帳」
3. 学会等名 渋谷近現代研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩橋清美
2. 発表標題 青山久保町に見る江戸青物市場の特質
3. 学会等名 渋谷近現代研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 林和生
2. 発表標題 地形と地質から見る渋谷の地理的特徴
3. 学会等名 渋谷近現代研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青木歳幸
2. 発表標題 我が国薬事制度と永松東海
3. 学会等名 日本医史学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田原光泰
2. 発表標題 鍋島侯爵家の渋谷開発
3. 学会等名 渋谷近現代研究会公開シンポジウム「松濤と代官山の暮らしを探る」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 内山京子
2. 発表標題 鍋島侯爵家の生活空間と家政構造
3. 学会等名 渋谷近現代研究会公開シンポジウム「松濤と代官山の暮らしを探る」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 青木歳幸
2. 発表標題 鍋島家と肥前協会名簿の周辺
3. 学会等名 渋谷近現代研究会公開シンポジウム「松濤と代官山の暮らしを探る」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 手塚雄太
2. 発表標題 戦前期渋谷の宅地開発と共託社
3. 学会等名 渋谷近現代研究会公開シンポジウム「松濤と代官山の暮らしを探る」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 根岸茂夫
2. 発表標題 戦時期における渋谷の借家層と住宅環境
3. 学会等名 渋谷近現代研究会公開シンポジウム「松濤と代官山の暮らしを探る」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高久舞
2. 発表標題 西郷山公園域の生活文化
3. 学会等名 渋谷近現代研究会公開シンポジウム「松濤と代官山の暮らしを探る」
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 上山和雄・内山京子・中澤恵子編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 416
3. 書名 久邇宮家関係書簡集－近代皇族と家令の世界－	

1. 著者名 渋谷近現代研究会編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 渋谷近現代研究会(研究拠点 國學院大學・佐賀大学)	5. 総ページ数 290
3. 書名 『鍋島家の近代を語る－東京渋谷と佐賀』令和2年度～令和5年度科学研究費補助金(研究種目:基盤研究(B)研究課題番号20H01315「戦前期東京における住宅開発と生活空間の変容－東京都渋谷区を事例に－」報告書1)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	林 和生 (Hayashi Kazuo) (30135488)	國學院大學・文学部・名誉教授 (32614)	
研究分担者	上山 和雄 (Ueyama Kazuo) (40137790)	國學院大學・文学部・名誉教授 (32614)	
研究分担者	岩橋 清美 (Iwahashi Kiyomi) (50749653)	國學院大學・文学部・教授 (32614)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	青木 歳幸 (Aoki Toshiyuki) (60444866)	佐賀大学・地域学歴史文化研究センター・特命教授 (17201)	
研究分担者	宮本 誉士 (Miyamoto Takashi) (60601200)	國學院大學・研究開発推進機構・教授 (32614)	
研究分担者	手塚 雄太 (Tezuka Yuta) (60802767)	國學院大學・文学部・准教授 (32614)	
研究分担者	内山 京子 (Uchiyama Kyouko) (60850089)	國學院大學栃木短期大学・その他部局等・准教授 (42202)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関